

神戸市外国語大学 イスパニア学科

白石 汐音

2年

本当に必要なものとは

ここに住んでいる人々は幸せなのではないだろうか。私たちが考える援助など本当に必要なのか。

私はラオスへ国際協力に関するフィールドスタディに行った時、また現在留学しているメキシコに住んでいる先住民の人々と交流した時にそのようなことを感じた。広大な自然の中で自由気ままに過ごしている。人々は笑いを絶やさず自分たちなりの生活を送っている。援助をすることが逆に彼らの静かな生活を壊してしまうのではないだろうか。

今まで私は漠然と、貧しい国は暗い雰囲気活気もなく一刻も早く私たちの

援助が必要なはずだと考えていたが、実際に現地に行ってみると人々は幸せそうに暮らしている。しかしその幸せそうな暮らしの中をよく観察すると奇妙な点もあるのだ。私たちと同世代の女の子がやけに少ないのである。その理由は、隣国に出稼ぎに行ったり、家族を養うお金を稼ぐために都市部で水商売をしたりして家族と一緒に住んでないからであった。その現実を知った時に私は、表面的な部分を見ているだけでは決して解決しない問題が貧しい国には存在しているのだということを知った。

では、私たちに何ができるのか。それを考えた時に異文化交流を国際協力のフィールドに持ってくるのはどうかと思った。そもそも彼らは持っている情報が少ないために、一生村で過ごすか、隣国へ出稼ぎに行くという選択肢しかないのではないか。実際、メキシコの先住民の子どもは韓国という国を知らなかった。また、カンボジアで私の友人が行った調査では、子供達が知っている職業は農家や医者、学校の先生に限られ、実際になりたい職業もその知っている職業に絞られてくるといったことがわかった。そこで異文化交流をすることで彼らの視野を広げ将来生きて行く上での選択肢を広げることができるのではないかと考えた。何より私たちの世代が最も身近に行える国際協力の形である

ということも理由の一つである。

では、どのように行うのか。それは、私たちが発展途上国と呼ばれている国に行き、子供達に日本の文化を紹介して共に遊んだり、現地にある遊びや踊りを教えてもらったりしながら交流すれば良いのではないか。ただ単に共にスポーツをしたり絵を描いたりするだけでも日本人という存在を知ってもらうことができるし、興味を持ってもらうことができるだろう。実際、私はラオスのある村で子供達とスポーツをしたが、子供達は日本人という存在に興味津々で私の周りから離れず、様々な質問をしてくる子や近くに来ないながらも日本人が何をし出すのだろうという顔で見つめている子が多くいた。この交流によって子供達が違う国や村外のことに興味を持つきっかけになるのではないかと感じた。また発展途上国といえどもスマホなどの電子機器が発達している村も多くある。そのためこのような機会さえあれば自分たちの力で他の国に勉強しに行くという選択肢や、もし自分が無理でも自分の子供に、という選択肢もできるかもしれない。

そして私たち自身も学びを得ることができる。実際に現地に行かないとわからないこと、例えば現地の雰囲気や人々の暮らし、そして現在の生活環境。確

かに私たちはインターネットから情報としては得ることができるかもしれない。しかし実際に現地に行かないと現時点で何に対して一番援助が必要なのか、どうしてこのような問題が起こっておりなぜ今まで解決されてこなかったのか、ということにはわからない。今の私たちができることは限られているが、このような経験を通して将来の私たちに何ができるのかを考えることができるのではないか。

つまり、異文化交流という国際協力の概念とはかけ離れて見える行いを通して、現地の方々が現在、また将来に対する広い視野を持つことで村内に存在する悪循環を断ち切るきっかけをつくと同時に私たちが将来それらの国々に対して何ができるのかを考えることができるのではないだろうか。

(1596字)